

幼児期における感情理解の発達：
3種類の課題と言語発達検査による検討

鄭 牙 源*

Young children's emotional understanding as assessed
by three tasks and a verbal test

JUNG Awoun

Abstract

To examine the development of emotional understanding during young childhood in relation to verbal development, we conducted emotion recognition (ER), emotion labeling (EL), and affective perspective taking (appearance-reality emotion understanding; AR-EU) tasks together with a verbal test (Picture Vocabulary Test-Revised) with 67 preschool children (3–6 years old). The main results were as follows. First, EL and AR-EU scores increased with increasing age, whereas ER seemed to be well developed by around 3–4 years of age. The persistence of relatively low AR-EU scores even in 6-year-olds suggests that AR-EU continues to develop during elementary school. Second, some significant relationships between the understanding of emotion and language development were observed. Third, a significant gender effect was found only for the AR-EU task. This may indicate that the development of affective perspective taking is influenced by other abilities such as theory of mind and social behavior.

Keywords : Emotion recognition, Emotional understanding, Affective perspective taking,
Preschool children, Verbal development

問題

近年、子どもの言語能力や感情理解などの社会的認知能力への関心が高い (Carpendale & Lewis, 2006)。乳幼児の感情理解の発達過程を調べるのに、これまで、対象児の年齢や感情理解の水準に応じた提示刺激や反応のさせ方によって、複数の種類の課題が実施されてきた。

まず、乳児を対象とする場合は、馴化-脱馴化法や選好注視法により、表情刺激への反応が調べられてきた。この手法により、生後7か月の乳児が喜びと恐怖の表情を識別でき (Kotsoni, de Haan, & Johnson, 2001)、生後4か月の乳児でも怒りと喜びの表情を識別できる (LaBarbera, Izard, Vietze, & Parisi, 1976) ことが示されている。さらに、新生児 (平均36時間) でも喜び、悲しみ、驚きの3種の表情を識別できることを示唆する知見もある (Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982)。おおよそ生後半頃までに、乳児が表情を識別できるようになっていることが示されているが、乳児がその表情の持つ感情的意味をどの程度理解しているかは明らかではない。

キーワード：表情識別、感情ラベリング、感情的視点取得、幼児、言語発達

*平成31年度生 人間発達科学専攻

表情の持つ感情的な意味の理解については、言葉が発達してくる幼児を対象に、感情語と表情刺激等をマッチングさせる課題により、その理解の程度が追究されてきた。Harrigan (1984) は3、6、9、12歳の子どもを対象に感情語を提示し、感情語に対応する表情を、複数の表情図から選択させる表情識別課題、および、提示された表情図に関する感情語を自由に述べさせる感情ラベリング課題を行った。その結果、どの年齢でも、表情識別課題の方が感情ラベリング課題より良い成績であった。国内では、櫻庭・今泉 (2001) が、2歳から4歳の幼児を対象に2種類の表情識別課題を行っている。まず、「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」の4つの感情語を提示し、それに対応するミッキーとコニーのキャラクターを用いた表情図を選択させる表情識別課題(言語呈示課題：櫻庭・今泉, 2001)を行い、その後、乳児の写真を呈示し、その表情と対応する2種類のキャラクターの表情図を選択させる表情呈示課題を行った。その結果、どの年齢でも表情識別課題の方が、表情呈示課題より良い成績を示した。これらの研究から、幼児にとって、表情そのものの意味的判断をするより、感情語にあう表情を選ぶ方が容易であるといえる。しかし、このような課題の実施のみでは、感情語に対応する表情を選んでいる子どもが、どれくらい感情語を正確に理解しているのかは曖昧である。

これに対し、幼児を対象に、特定の感情を生起させる状況を言葉で伝え、その生起する感情を表情刺激や感情語で答えさせる課題もある。Michalson & Lewis (1985) は、2歳から5歳の幼児と成人を対象に、「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」「恐れ」「嫌悪」のうちの1つの感情が生起する一義的な状況の物語を提示し、各物語の登場人物が示すであろう表情を選択させた。その結果、2、3歳の幼児でも、登場人物が示す表情をある程度判断できること、2歳から5歳にかけてその正答率が漸増していくことが示された。国内では、森野 (2005) が3歳から6歳の幼児を対象に、短い刺激文を提示し、それに該当する表情図を選択させる課題を行っている。具体的には、参加児や主人公の特性に関わらず、「喜び」「悲しみ」「怒り」「恐れ」のいずれか1つの感情が喚起される刺激文と、参加児や主人公の特性(例：砂遊びが好き／嫌い)により、喚起が予想される感情が異なる刺激文(例：雨が降って保育園の砂遊びが中止になった)を提示し、対応すると思われる表情図を選択させるものであった。併せて、心の理論の測定課題として2種類の誤信念課題(移動課題、信念変化課題)と言語発達検査、教師による社会的スキルと人気度の尺度評定が行われ、心の理論が発達しているほど感情理解も発達しているが、年長児では、心の理論が発達しているほど優れた社会的スキルと人気を有するものの、感情理解と社会的スキルとの関連は示されなかったという。さらに、柘田 (2014) は、1つの感情が一義的に対応づけられる刺激文を提示し、該当する感情を答えさせる課題(感情ラベリング課題)と非言語的な感情課題(主人公の表情を描く課題と表現課題)を年中児と年長児を対象に行っている。その結果、感情ラベリング課題で年長児が年中児より成績が高く、非言語的な感情課題ではその差は見られなかった。

他に、幼児の感情理解を調べるための課題として、生起される感情に関する直接的な情報や説明がなく、ときとして表情も参考にしつつ物事の前後の状況や文脈に基づき、登場人物の感情を推測させるような、感情的視点取得(affective perspective taking)課題もある(Eisenberg & Lennon, 1983)。感情的視点取得は、他者の感情について状況を踏まえて読み取ることで、必ずしも表情に現れるとは限らない他者の真の感情を理解できることを意味する。そのため、ある状況下での他者の真の感情と人に見せるための偽りの感情を区別し理解できるかを問う課題として検討されることが多い。え、向社会的行動との関連がよく調べられてきた(Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson, 1986; Lane, Wellman, Olson, LaBounty, & Kerr, 2010; 石黒・榎本・山上, 2015)。石黒他(2015)は、見かけ・本当の感情理解課題と対人的問題解決課題を年少児、年中児、年長児に実施し、保育士にChild Behavior Scale (CBS) の日本語版(中澤・中道, 2007)への回答を求めたところ、感情的視点取得は年齢に伴い成績が上昇するが、対人的問題解決は年長児のみが他年齢群よりも有意に高い成績で、向社会的行動は年長児と年中児が、年少児よりも有意に多いことが示されたという。感情的視点取得と対人的問題解決の成績が良いほど、より多くの向社会的行動を行うという相関関係も見出されたという。なお、この感情的視点取得課題は、刺激題材により難易度が大きく異なるため、いつ頃からどのような理解が可能になるのか海外の知見をみても曖昧なところがある。

以上の感情理解を検討する課題について、本間・内山 (2013) は、表情を用いた感情理解課題と状況手がかりの感情理解課題を区別し、感情的視点取得課題を状況手がかりの感情理解課題と同様に取り上げることができることを示している。一方、Pons, Harris, & de Rosnay (2004) によると表情を用いた感情理解と状況手がかりの感情

理解は外部の次元に含まれ、感情的視点取得課題は精神といった異なる次元に含まれていると主張している。しかし、幼児における主要な3種類の感情課題間の関係性は、筆者の知る限り、国内で実証的に検討されたことはなく、日本語母語の幼児における発達過程の詳細は検証されていない。さらに、どの年齢でどのくらいできるのかや、その発達を進み方は必ずしも明らかではない。表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題を、複数の年齢群の同じ幼児に実施することで、日本語母語の幼児における、これらの感情課題への年齢による理解の度合の違いを、明らかにできると考えた。

さらに、言語能力との関係について触れておきたい。感情理解を調べる課題では、感情語や状況の説明など、言語的な理解が関わってくる。近年、国外では複数の感情課題と併せて、言語発達検査も行われるようになってきているが、知見は少なく詳細は明らかではない (Eisenberg, Sadovsky, & Spinrad, 2005; Kärstad, Wichström, Reinfjell, Belsky, & Berg-Nielsen, 2015)。国内では、複数の感情課題と言語能力をあわせて検討している先行研究はほぼ見当たらない。日本語の幼児における、感情理解の発達度合と言語発達との関係性に関するデータも、必要であると考えられる。

以上をまとめると、本研究では、感情理解に関して異なる側面に焦点をあてている3つの課題、すなわち、表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題に加え、PVT-R語彙発達検査を同じ年少児、年中児、年長児に実施し、感情理解の発達過程と、その言語発達との関係性を調べることを目的とする。予想される結果は、Michalson & Lewis (1985) 等を参考にすると、表情識別課題は年少児でも正答率が高いが、基本的には子どもの年齢とともに他者の感情を理解するために用いる手がかりが増えていくことである。特に、年少児より年中児と年長児で表情識別課題の得点が高くなり、年少児と年中児より年長児で感情ラベリングと感情的視点取得の得点が高くなると予想した。また、子どもに用いられる3種類の感情理解課題間で正の相関関係が見られると予想できる。最後に、子どもの感情理解と言語能力の間に正の相関関係が見られ、年齢を統制した上でも、その関連は弱くなるものの正の相関が見られると予想した。

方法

調査参加児

参加児は、都内のある幼稚園に通う3～6歳の年少児20名（男児12名、女児8名；M=45.75ヶ月、SD=5.37ヶ月、範囲：36～53ヶ月）、年中児22名（男児12名、女児10名；M=58.41ヶ月、SD=3.20ヶ月、範囲：53～63ヶ月）、年長児25名（男児15名、女児10名；M=71.00ヶ月、SD=2.93ヶ月、範囲：66～77ヶ月）の幼児67名であった。幼稚園の園長先生から同意書による同意を得て、幼稚園を通じて保護者に調査概要（調査内容や参加の任意性、個人情報の保護など）を記した依頼書と同意書を配布した。同意の署名を得られた保護者の子どもに調査を実施した。なお、子どもが調査への参加を拒否した場合には、調査から除外した。

材料と手続き

課題はすべて、幼稚園の了承のもと、幼稚園内の静かな部屋で約5分間の遊び時間を設け、子どもが調査への参加を希望した場合、本調査課題を行った。調査中に子どもの集中力が低下されたと判断された場合には、休憩時間を挟んで調査を進めた。反応を正確に分析するために、参加児が調査に参加している様子を参加児の保護者と園から事前に同意を得てビデオカメラで撮影した。調査は、PVT-R語彙発達検査から始め、表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題はカウンターバランスを取りランダム順に行われた。各子どもの参加時間はおよそ35分～45分であった。

PVT-R絵画語彙発達検査 最初に、言語発達を調べるためPVT-R絵画語彙発達検査を行った（上野・名越・小貫, 2008）。PVT-Rは、3～12歳の子どもの受容語彙を測定できる検査として幅広く用いられている。PVT-Rの得点は、絵画語彙発達検査の手引きに準じて行われた。

表情識別課題 (Emotion Recognition) 表情識別課題として、櫻庭・今泉 (2001) を参考に「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」の感情に対して、ミッキーマウス、女の子、男の子の3種類の表情図を作成した。すべて顔の表情だけを表し、涙などの感情を予測できるような要因は排除されていた。各表情図は、10cm×10cmのカー

ドに個別にカラーで印刷された。なお、各表情図が、想定する適切な感情表現になっているかを確認するため、成人 ($N=10$) を対象に予備調査を行った結果100%同じかつ正答の反応を得ることができたため、そのまま本調査で使用することにした。

表情識別課題では、参加児に感情語を提示し、それに対応する表情図を選択させた。「喜び」の場合には、「この中で、喜んでいるのはどれですか。」と質問し、参加児に自由に指差しで答えを求めた。表情図の呈示順は、参加児の興味をひきやすいミッキーマウスの表情図を最初に呈示し、参加児が男の子の場合は男の子の表情図、女の子の場合は女の子の表情図を先に呈示した。表情図は縦2列、横2列で並べて感情語ごとに選択させたが、その配置は質問する感情ごとにランダムに変えた。感情語の提示順もランダムであった。課題得点は最大12点であった、その感情語に対応する表情を適切に選択できた場合には1点を与え、感情語を理解できず、異なる表情を選択したり、どの表情図も選択できなかった場合、わからないと答えた場合には0点を与えた。

感情ラベリング課題 (Emotion Labeling) 感情ラベリング課題は、柘田 (2014) で用いられた刺激文のうち「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」の4つの感情に該当する刺激文を用いた。「喜び」の場合には、「〇〇ちゃんがお腹を空かせてお家へ帰ると、夜ご飯のおかずは大好きなハンバーグでした。」という刺激文を提示した (柘田, 2014, p.154)。物語の主人公は参加児が男児の場合には太郎君、女児の場合には花子ちゃんとした。柘田 (2014) に倣い、「これからいくつかの短い物語を聞いてもらいます。その後で、主人公についてのクイズを出しますので、頑張って当ててみてください。」と教示した後、各感情に対応する1文を読みあげると、主人公の気持ちを問う質問をし、参加児に感情のラベリングを求めた。各感情に対応する刺激文の呈示順はランダムであった。

感情ラベリング課題の得点は、柘田 (2014) と同様に、主人公の感情を理解できず適切な感情語を答えられない場合は1点、主人公の感情がポジティブであるかネガティブであるかは理解できている、あるいは表現が不十分ではあるが、感情の方向性に関しては説明できている場合に2点、主人公の感情を正確に理解し、適切な感情語を述べた (もしくは適切にその感情を表す言葉を述べた) 場合に3点を与えた。使用した物語は、4感情であったため、得点範囲は最大12点、最低3点であった。

感情的視点取得課題 感情的視点取得を調べるのに、石黒他 (2015) が Lane et al. (2010) の課題を和訳して作成した、感情理解課題 (appearance-reality emotion understanding; AR-EU) を用いた。この課題の原版は、Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson (1986) が作成した8つの物語のうちから、Lane et al. (2010) が2つを選択し修正して作成したものである。物語はいずれも、他者とのやり取りの中で主人公がある感情を抱くが、それを表に出さず偽りの感情を表現する内容になっている。たとえば、1つは「彩花という女の子についてのお話です。彩花には優二という親戚がいました。彩花は優二の事があまり好きではありませんでした。だから、彩花は優二にいたずらをしたくて、優二のお気に入りのおもちゃをどこかに隠してしまいました。優二が家に帰って来ると、そのおもちゃをどこにも見つけることができません。彩花はそれを見てやったぞと思いました。でも、彩花は優二に本当の気持ちを知られたくありませんでした。知られたらいじめられると思ったからです。だから、彩花はどう感じたのか見せないようにしました。」 (石黒他, 2015, p.13) という物語であった。

具体的には、次のような手順を進めた。石黒他 (2015) に倣い、物語提示後すぐに「優二はおもちゃを探したけど見つけることはできたか。」など質問し、物語を理解しているかを確認した。物語が理解できてないと判断された場合には最多で3回まで物語を繰り返し読み聞かせた。物語を理解していることを確認できたら、(1) 主人公が本当はどのような感情を抱いたのか (「優二がおもちゃを見つめることができなかつたとき、彩花は本当はどのように感じたか。」、(2) その感情を抱いた理由は何か (「なぜ彩花はそう感じたか。」、(3) 主人公が他者に見せた偽りの感情はどのようなものか (「優二がおもちゃを見つめることができなかつたとき、彩花はどのように感じているように見せようとしたか。」、(4) その感情を見せた理由は何か (「なぜ彩花はそのように感じているように見せようとしたか。」、の4つを順に質問した。この4つの質問のうち(1)と(3)に対しては「嬉しい・悲しい・何も感じないの中で一つ選んでください。」と3つの選択肢を与え、その中から回答させた。その他の質問に対しては、参加児に自由に答えさせた。

感情的視点取得課題の得点化は、石黒他 (2015) と同様に行った。主人公の偽りの感情を尋ねる(3)の質問のみ、正しい回答と判断された場合には3点を与え、その他の質問においては、正しい回答と判断された場合に2点を与えた。物語は、男の子が主人公の物語と女の子が主人公の物語の2つであったため、最大18点、最低0

点という得点範囲であった。

結果

まず、子どもの年齢に伴う感情理解の発達を検討するため、学年別にPVT-R語彙発達検査、表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題の得点の平均と標準偏差を算出し、学年を独立変数とした1要因分散分析と多重比較（Tukey-Kramer法）を行った（Table 1）。

Table 1 学年における各課題の得点の記述統計量

	年少		年中		年長		F	p	多重比較
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差			
PVT-R	12.40	6.20	19.55	7.78	30.16	9.22	28.63	.000	年長>年少** 年中>年少** 年長>年中*
表情識別	11.40	1.05	11.77	.53	11.68	1.30	.96	.387	n.s.
ラベリング	6.85	1.90	8.55	2.20	10.00	2.24	12.17	.000	年長>年少** 年中>年少*
感情的視点取得	3.50	3.14	4.64	2.99	6.76	5.17	3.93	.025	年長>年少*

注) * $p<.05$, ** $p<.001$

その結果、年少児、年中児、年長児の間でPVT-R語彙発達検査結果に有意差が見られた ($F(2, 64) = 28.63, p < .001$)。多重比較の結果、年少児より年中児と年長児で ($p < .001$)、年中児より年長児で有意に高い得点を示した ($p < .05$)。一方、表情識別課題においては学年による有意差はみられなかった ($F(2, 64) = 0.96, p = .387$)。また、感情ラベリング課題で学年間で有意差が見られた ($F(2, 64) = 12.17, p < .001$)。年少児より年中児 ($p < .05$) で、さらに、年少児より年長児で有意に高い得点を示した ($p < .001$)。しかし、年中児と年長児の間で有意差はみられなかった。感情的視点取得課題でも学年間の有意差が見られ ($F(2, 64) = 3.93, p = .025$)、多重比較の結果、年少児より年長児で有意に高い得点を得たことが示された ($p < .05$)。しかし、年少児と年中児、年中児と年長児の間で有意差はみられなかった。

次に、感情理解課題間の関係を調べるため、月齢、PVT-R語彙発達検査の得点、表情識別課題成績、感情ラベリング課題成績、感情的視点取得課題成績の間で相関係数を算出した（Table 2）。月齢とPVT-R語彙発達検査 ($r = .68, p < .001$)、感情ラベリング課題 ($r = .55, p < .001$)、感情的視点取得課題 ($r = .34, p < .001$) との間で有意な正の相関が見られた。また、PVT-R語彙発達検査と表情識別課題 ($r = .39, p < .001$)、感情ラベリング課題 ($r = .59, p < .001$)、感情的視点取得課題 ($r = .48, p < .001$) との間で有意な正の相関が見られた。感情理解の課題間では、表情識別課題と感情ラベリング課題 ($r = .56, p < .001$)、感情ラベリング課題と感情的視点取得課題 ($r = .47, p < .001$) との間で有意な正の相関が見られた。

Table 2 月齢と感情理解課題, PVT-R語彙発達検査の間の相関係数

	月齢	PVT-R	表情識別	ラベリング	感情的視点取得
月齢	—				
PVT-R	.68**	—			
表情識別	.20	.39**	—		
ラベリング	.55**	.59**	.56**	—	
感情的視点取得	.34**	.48**	.23	.47**	—

注) 数値はPearsonの相関係数。 * $p < .05$, ** $p < .001$

さらに、感情理解課題と言語能力の関係を検討するため、月齢を統制した上で、PVT-R語彙発達検査、表情識別課題成績、感情ラベリング課題成績、感情的視点取得課題成績の間で偏相関係数を算出した（Table 3）。PVT-R語彙発達検査と表情識別課題 ($r = .35, p = .004$)、感情ラベリング課題 ($r = .34, p = .006$)、感情的視点取得

課題 ($r = .38, p = .002$) との間で有意な正の相関が見られた。感情理解の課題間では、表情識別課題と感情ラベリング課題 ($r = .54, p < .001$)、感情ラベリング課題と感情的視点取得課題 ($r = .37, p = .002$) との間で有意な正の相関が見られた。

最後に、子どもの性別による違いがあるのかを検討するため、性別を独立変数とした t 検定の結果、PVT-R、表情識別課題、感情ラベリング課題では有意差はみられなかったが ($p > .10$)、感情的視点取得課題のみで女兒が男児より有意に高い得点を得たことが示された ($t(65) = -2.39, p = .020$)。

Table 3 月齢を統制した各課題間の偏相関係数

	PVT-R	表情識別	ラベリング	感情的視点取得
PVT-R	—			
表情識別	.35*	—		
ラベリング	.34*	.54**	—	
感情的視点取得	.38*	.17	.37*	—

注) 月齢を統制. 数値はPearsonの相関係数. * $p < .05$, ** $p < .001$

考察

本研究は、表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題を、言語発達検査と併せて、同じ幼児を対象に実施し、現在の日本語母語の幼児における感情理解の発達過程を検討することを目的としていた。

まず、感情理解の発達について検討する。表情識別課題においてはいずれの群でも平均点が11点以上と高く、学年による有意差は見られず、表情に基づく感情識別は、3、4歳頃までには発達していることが示された。この結果は、表情刺激を区別している様子が乳児でも見られることや年少の幼児における類似の課題での正解率の高さを示した、従来の知見と一致している (Kotsoni, de Haan, & Johnson, 2001; Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982; LaBarbera, Izard, Vietze, & Parisi, 1976)。一方、感情ラベリング課題では、年少児より年中児と年長児で有意に得点が高く、年中児と年長児の間では成績に有意差がないことが示された。年中児と年長児に同課題を行った柘田 (2014) では、年中児と年長児の間で有意差がみられ、2年齢群における成績が本研究の2年齢群の成績よりも少し高めであったものの、本研究では新たに年少児の結果を得るとともに、年中児で感情ラベリング課題の成績と月齢の間に有意な正の相関が見られるという結果を得た。この結果から、年少から年中にかけてとその後の5歳前後に、感情ラベリングの課題成績 (感情内容の言語的理解力) が特に上がっていく可能性を示すことができた。感情的視点取得課題では、年少児と年長児の間で成績に有意差が見られ、年少児と年中児、年中児と年長児の間では有意差が見られず、年長児でも平均得点は6.76と得点率は50%に満たなかった。同じ年齢群に同課題を実施している石黒他 (2015) では、全年齢群で本研究より成績が高く、各年齢群間で有意な成績差がみられた点で本結果と少し異なる。本研究の相関分析の結果から、年齢や言語発達との有意な正の相関を見出し、さらには、表情識別とは有意な相関関係は見出せなかったが、感情ラベリング課題成績との間に正の相関関係を見出した。感情的視点取得については、感情ラベリングで求められる理解力を前提としつつ、短期間ではなく、年少から年長にかけて漸次的に発達していき、児童期以降に高い理解力に達する可能性を示唆できたと思われる。

また、子どもの感情理解能力を調べる3種の感情理解課題間の相関分析の結果から、表情識別課題と感情ラベリング、感情理解課題と感情的視点取得課題との間でも正の相関が見られた。しかし、表情識別課題と感情的視点取得課題との間では有意な相関が見られなかった。このことから、表情識別課題と感情的視点取得課題はそれぞれ独立して感情ラベリング課題と関連していると考えられる。本間・内山 (2013) の研究でも、他者の感情理解能力を測定できる課題の中で、表情を手がかりとする感情理解課題と感情的視点取得能力を測定する課題とは異なるものであると考えられている。一方、状況を手がかりとする感情ラベリング課題の場合には、他者の立場になってその人の感情を理解するという共通点を持っている。さらに、このような感情理解は、心の理論と関連していることが明らかになっている (森野, 2005; 溝川・子安, 2011; Wondra & Ellsworth, 2015)。各課題は独

立している感情理解能力を調べていると考えられるが、3つの課題遂行能力は、部分的に互いに影響し合って発達していくことが示唆されたといえる。

ここまでについてまとめると、感情語による表情識別、感情ラベリング、感情的視点取得の順で発達すること、表情識別は3、4歳頃までに既に発達しており、感情ラベリングは年少児から年中児にかけての発達が著しく、感情的視点取得は幼児期を通じて漸次的に発達するが年長児でもまだ十分ではないことが示されたといえよう。この発達の順番は、筆者が予測した通りであった。なお、感情ラベリング、感情的視点取得課題のみをそれぞれ行った先行知見よりも本研究の幼児では少し成績が全体的に低かった。同様に都市部の幼児を対象に行ったことから、幼児の能力差を反映している可能性は低い。先行研究との間に課題負担に差がなかったことから、近年懸念されている、幼児期の社会性の低下に伴う感情理解力の低下が可能性として考えられるのか、当該領域でのさらなるデータの蓄積と検討が必要と思われる。

次に、幼児における感情理解と言語能力との関係性について考察していく。PVT-Rの得点と各課題との間の相関関係を調べた結果、すべての課題において語彙発達検査との間に有意な相関が見られ、幼児の他者に対する感情理解は言語能力とともに発達していくことが示唆された。一方、感情理解能力と言語能力は月齢とともに発達していくため、月齢を統制した上で、各感情理解課題間の偏相関係数を調べた。その結果、すべての課題において語彙発達検査との間に有意な正の相関が見られた。このことから、感情理解課題において言語能力は必要不可欠であることが示唆された。さらに、年齢とともに感情理解が発達していくものの、そこには言語能力が大きく関連していることが明らかになった。PVT-Rの得点において、学年間で有意差が見られ、また、年長児で標準偏差（すなわち個人差）が大きいことが示されているが、平均得点の数値を見ると、年少児、年中児がそれぞれ12.40、19.55であるのに対して年長児では30.16であり、年長児での個人差の大きさも考慮すると、年中から年長にかけてとその後の6歳前後に、PVT-Rで測られるような言語能力の発達やその発達さの個人差が著しく、そのPVT-Rでもとめられるような言語能力の発達が感情理解と関係している可能性が高い。

さらに、感情的視点取得課題のみで見られた性差について触れておきたい。同じ感情的視点取得課題を行った、石黒他（2015）では、性差は報告されていない。従来、国内で行われてきた、幼児の感情理解課題（いずれも感情的視点取得課題ではない課題）でも、性差は報告されていない。海外における幼児の感情理解の課題でも、筆者らの知る限り、性差についてはほぼ報告されていない。しかし、石黒ほか（2015）で、より熟練した感情的視点取得を持つ子どもほどより高い向社会的行動を行うことが示されている。また、水島（1992）は、向社会的行動を行うかどうか、他者の視点に立って思考できるか否かが、男児より女児においてより強く関係していると述べている。これらの知見から、性別によって向社会的行動の発達度合に差があり、その差が子どもの感情的視点取得に反映されている可能性が考えられる。今後、データを蓄積し、日本では性差があるのか否か、性差がある場合のその要因について追究していく必要がある。

本研究では、表情識別課題、感情ラベリング課題、感情的視点取得課題を言語発達検査と併せて同じ子どもに実施したが、年少児から年長児までの発達過程を言語発達との関連を含めて包括的に検討した研究は国内外ではほぼなされておらず、国内では、幼児期の感情理解に関する研究自体、本論文で引用した文献以外はほぼ実施されていない。幼少期における感情理解を含む社会性の発達に関する懸念が高まりつつある昨今、現在の日本の幼児における感情理解の実態について、年齢差と言語発達との関連を示す基礎資料を提供できたことに、本研究の意義があると考えられる。また、感情的視点取得課題で性差が示されたことも特筆に値する。今後は、この結果を踏まえ、年齢と言語発達以外の要因が、感情理解の発達にどう関わっているのかを検討していく必要があると考える。

【引用文献】

- Carpendale, J., & Lewis, C. (2006). *How children develop social understanding*. Blackwell Publishing.
- Eisenberg, N., & Lennon, R. (1983). Sex differences in empathy and related capacities. *Psychological bulletin*, 94, 100-131.
- Eisenberg, N., Sadovsky, A., & Spinrad, T. L. (2005). Associations of emotion-related regulation with language skills, emotion knowledge, and academic outcomes. *New directions for child and adolescent development*, 2005(109), 109-118.
- Field, T. M., Woodson, R., Greenberg, R., & Cohen, D. (1982). Discrimination and imitation of facial expression by neonates. *Science*, 218 (4568), 179-181.

- Harrigan, J.A. (1984). The effects of task order on children's identification of facial expressions. *Motivation and Emotion*, 8(2), 157-169.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child development*, 57(4), 895-909.
- 本間優子・内山伊知郎 (2012). 幼児・児童における他者感情理解能力と感情的視点取得能力に関する研究のレビュー-両者の相違についての検討-新潟青陵大学学会誌, 5(3), 71-79.
- 石黒良和・榎本玲子・山上精次 (2015). 幼児の感情的役割取得と対人的問題解決から予測される対人行動 専修人間科学論集 心理学篇, 5, 1-14.
- Kårstad, S. B., Wichstrøm, L., Reinjfell, T., Belsky, J., & Berg - Nielsen, T. S. (2015). What enhances the development of emotion understanding in young children? A longitudinal study of interpersonal predictors. *British Journal of Developmental Psychology*, 33(3), 340-354.
- Kotsoni, E., de Haan, M., & Johnson, M. H. (2001). Categorical perception of facial expressions by 7-month-old infants. *Perception*, 30(9), 1115-1125.
- LaBarbera, J. D., Izard, C. E., Vietze, P., & Parisi, S. A. (1976). Four-and six-month-old infants' visual responses to joy, anger, and neutral expressions. *Child Development*, 47(2), 535-538.
- Lane, J. D., Wellman, H. M., Olson, S. L., LaBounty, J., & Kerr, D. C. (2010). Theory of mind and emotion understanding predict moral development in early childhood. *British Journal of Developmental Psychology*, 28(4), 871-889.
- 栢田 恵 (2014). 幼児期における感情の理解と表情表現の発達 発達心理学研究, 25(2), 151-161.
- Michalson, L., & Lewis, M. (1985). What do children know about emotions and when do they know it?. In Lewis, M., & Saari, C. (Eds.). (2012). *The socialization of emotions: Vol. 5* (pp. 117-139). Boston, MA: Springer Science & Business Media.
- 溝川 藍・子安増生 (2011). 5, 6 歳児における誤信念及び隠された感情の理解と園での社会的相互作用の関連 発達心理学研究, 22(2), 168-178.
- 森野美央 (2005). 幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連 発達心理学研究, 16(1), 36-45.
- 中澤 潤・中道圭人 (2007). 子どもの行動尺度 (CBS) 日本版の作成 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 97-105.
- Pons, F., Harris, P. L., & de Rosnay, M. (2004). Emotion comprehension between 3 and 11 years: Developmental periods and hierarchical organization. *European journal of developmental psychology*, 1(2), 127-152.
- 櫻庭京子・今泉 敏 (2001). 2~4 歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較 発達心理学研究, 12, 36-45.
- 上野一彦・名越齊子・小貫 悟 (2008). PVT-R 絵画語い発達検査. 東京: 日本文化科学社.
- Wondra, J. D., & Ellsworth, P. C. (2015). An appraisal theory of empathy and other vicarious emotional experiences. *Psychological Review*, 122(3), 411-428.